

[Ah!] No.46

Contents

■建築の現場シリーズ

- 長野 [生まれ変わる長野駅善光寺口](#)
遠山 健幸（長野市都市整備部都市計画課）

■かくれた建築シリーズ

- 石川 [主計町の茶房「土家」](#)
山崎 幹泰（金沢工業大学環境・建築学部建築デザイン学科 准教授）

■建築文化週間2013 開催報告

- 福井 [越前若狭の建築文化探訪（第3回）](#)
[「福井の地から建築史・建築論研究を考える](#)
[—森田慶一『西洋建築史概説』刊行50周年を記念して—」](#)
市川 秀和（福井工業大学工学部建築生活環境学科 教授）

●お知らせ

- 北陸支部Web広報誌AH!への投稿を随時受け付けております。
建築学会北陸支部内（新潟県・長野県・富山県・石川県・福井県）に在住の方であればどなたでも投稿可能です。詳しくは下記事務局までお問い合わせください。
- 賛助会員を募集しております。
詳しくは下記事務局までお問い合わせの程お願いいたします。

(一社)日本建築学会 北陸支部
〒920-0863 石川県金沢市玉川町15番1号 パークサイドビル3F
Tel: 076-220-5566 / Fax: 076-220-3344 / E-mail:aij-h@p2222.nsk.ne.jp

(平成26年3月28日(金)発行)

Access count: 00346

■ 建築の現場シリーズ（長野）

生まれ変わる長野駅善光寺口

遠山 健幸

（長野市都市整備部都市計画課）

長野駅善光寺口は、平成9年の長野新幹線開業や翌年の長野オリンピック開催に合わせ、駅の橋上化や東西自由通路など最小限必要な施設の整備が行われ、駅前広場については時間的な制約もあって暫定的な整備にとどまっていた。このため、北陸新幹線が金沢に延伸される平成27年春までに、駅前広場における交通機能の充実と利便性の向上を図るとともに、長野の玄関口にふさわしい新たな顔づくりを行うため、本格整備に着手しました。デザインコンセプトには、長野の歴史・伝統と自然を活かした、長野らしい「おもてなしの心」を駅前広場で表現することを掲げ、歩行者専用デッキや地下通路、エレベーター、エスカレーターなどの整備を進めています。また、この駅前広場の整備にあわせ、JRでも駅ビルの建設を進めています。（写真1、図1）

駅前広場の整備の中で最も特徴的なのは、駅ビルの前面に駅ビルと一体で建設する大庇とこれを支える12本の列柱です（図2）。主要構造は鉄骨造で、高さ約18m、奥行き約15m、幅約140mの大きな建造物になります。大庇は、ガラス屋根の下に杉材を使用したルーバーを並べます。また、大庇を支える列柱は、約90cm角の大きさで、大庇のルーバーと同じように杉材で化粧を行います。使用する杉材は、全て長野市内の山林から伐り出されたもので、その本数は約1万2千本にもなります。この大庇・列柱は、来訪者をお迎えする門の役割を果たすと同時に、その大きな空間に装飾を行うことで、イベント時の演出装置としても活用したいと考えています。

駅前広場の整備にあわせ、市民や市民団体、地元商店会、学校、行政など様々な個人や団体が連携し、市民が主体となった駅前広場の利活用促進を図るため「長野駅善光寺口利活用ネットワーク（利活ネット）」が昨年8月に設立されました。これまでに利活ネットでは、ワークショップでの検討（写真2）をもとに、市に対して駅前広場の利活用に関する提言を行いました。また、駅前広場の整備や利活用に関して市民に関心を持ってもらうため、大庇・列柱に使用する杉材の伐採現場などを見学する「市産木材見学ツアー」（写真3）や、駅前広場の工事囲いを利用して市民等のアート作品を展示する「工事囲いアート展」などのイベントを開催するなど、精力的に活動しています。

北陸新幹線が金沢まで延伸される平成27年春は、7年に1度開催される善光寺御開帳の年でもあります。全国からお越しになる皆様を長野らしい「おもてなしの心」でお迎えし、長野の魅力を全国に発信できるよう、市民と行政が一体となって取り組みを進めています。

生まれ変わる長野駅善光寺口にご期待ください。

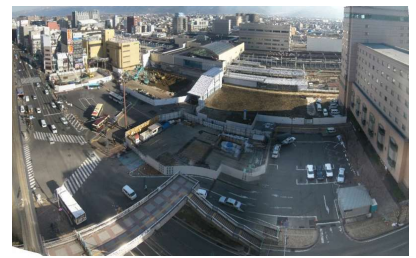


写真1

現在の長野駅善光寺口駅前広場の様子
（平成26年1月現在）



図1 長野駅善光寺口駅前広場の
整備イメージ



図2 大庇・列柱の整備イメージ



写真2 ワークショップの様子



写真3 市産木材見学ツアーの様子

■かくれた建築シリーズ (石川)

主計町の茶房「土家」

山崎 幹泰

(金沢工業大学環境・建築学部建築デザイン学科 准教授)

金沢市の重伝建地区の一つ、主計町は浅野川に面して茶屋建築が建ち並び、その町並みの一角に、空き家となっていた茶屋建築を改修した、落ち着いた風情のある「土家」(旧つちや・市指定)という喫茶店がある。大正2年に建てられた茶屋である。

木造二階建てで、間口は二間半。一階正面は間口一間半の出格子窓と一間の玄関からなり、格子はキムスコの細格子、腰壁には薄青色の笏谷石を用いる。格子の上に棧瓦葺の庇をかけ、庇の上は小壁。二階の雨戸は、腰部の鴨居敷居で分けられたガラス建具になっている。二階の階高は高く、縁庇のすぐ上には、大屋根の短い軒がかかる。現在の棧瓦葺きの大屋根は、当初石置き板葺屋根であったと思われる。背面は下見板張り、台所に出格子窓、二階に間口一杯のガラス窓を設ける。

内部は一列三段型の間取りで、正面向かって右手を玄関とする。奥行き一間の三和土があり、板の間へあがると、すぐに箱階段状に作られた弁柄の階段がまっすぐに昇り、階段の奥にさらに板の間が続く。正面向かって左手には、前部から店の間、茶の間、奥の間の三室。店の間は三畳、北側はキムスコの出格子窓で、その内側に六段、スライド式のガラス小窓が組み込まれている。ここではかつて、芸妓の着替えや化粧が行われた。茶の間は六畳で、板の間との境を開放する。壁には三味線棚があり、ここには大和風呂が置かれ、帳場として使われていた。奥の間は四畳半で、東側の壁面に釣床の痕跡が残るが、現在はカウンター席に改造されている。女将の寝室であり、仏壇も備えられていた。店の間と茶の間は根太天井で、奥の間は竿縁天井、柱や造作材には紅黒い漆掛けの光沢がある。階段より奥の板の間には、床下に土間と井戸の痕跡が残るが、現在は便所が設けられ、裏口へと通じる。

二階が本来の客座敷であり、前部から前座敷、中の間、後部に並列した小座敷が並んでいる。前座敷は八畳で最も広い部屋であり、西面に本床と付書院を備える。床脇には地板と地袋、境の壁には丸い下地窓を開ける。北側の縁の天井は小丸太と角の垂木が交互に並んでおり、手摺とともによく旧態をとどめている。付書院の障子や手摺の棧は、茶屋らしい繊細な造りである。中の間は五畳で、階段からの前後の座敷への動線の役割を持つが、ここで舞を踊ることもあったという。後部の座敷は、東側の奥の間は六畳に半間奥行きの床の間が張り出した体裁である。西側の小間は四畳に半間奥行きの吊床がついている。ともに狭い部屋ながら、簡略化した床を設けることで床面積を確保しつつ、客の人数に合わせて二室を使い分けていたものと考えられる。これら奥の二室には、縁の代わりに出窓が付けられ、手摺も設けられている。

二階中の間の押入れの中には急な階段が設けられており、上がると屋根裏のアマがある。かつては芸妓の寝場所であった。ただし、昭和40年代の繁盛期には、一階もアマも客座敷として使ったこともあったと伝えられる。



写真1 土家正面

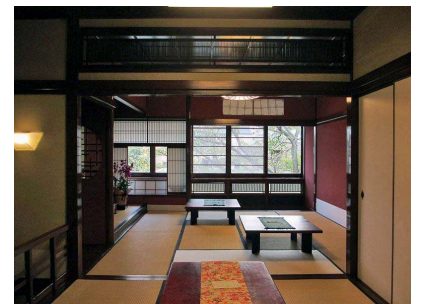


写真2 2階前座敷



写真3 小座敷

典型的な茶屋形式の建築であるが、ひがし茶屋街の茶屋建築と比較すると、間口が狭く、かつ中庭や付属屋を持たず主屋のみである点に特徴がある。主計町は浅野川岸の段丘面に位置し、表通りと裏通りの間隔が狭いことから、建物が表裏両通りに面することとなり、ひがしのように背割り型の敷地にならなかった。そのため、表裏から採光・換気が可能となり、中庭の必要がなかった。また、二階の動線を最小限とし、間口三間半を二室に分け、ともに床を備えた小座敷とする点には、間口の狭さを克服する工夫が見られる。それでも、芸妓の生活空間の確保は困難であったことから、アマも活用されたのであろう。

ひがし茶屋街も主計町も、外観は茶屋の姿を守りつつも、内部は大きく手を加えている建物が多い。その点、「土家」はあまり手が加わっておらず、かつての茶屋の華やかさをそのまま現代に伝える、貴重な空間である

建築文化週間2013 開催報告 ～福井支所～
越前若狭の建築文化探訪（第3回）

「福井の地から建築史・建築論研究を考える —森田慶一『西洋建築史概説』刊行50周年を記念して—

市川 秀和
（福井工業大学工学部建築生活環境学科 教授）

- 開催日時：11月10日（日）午後1時半～午後5時半
- 開催場所：アオッサAOSSA 6階研修室601-A
記念講演会の講師：加藤邦男（京都大学名誉教授）
シンポジウムのパネラー：白井秀和・国京克巳・池田俊彦・市川秀和

【記念講演会・シンポジウムの概要】

ウィトルウィウス建築書の邦訳などで名高い森田慶一（1895～1983）が著した『西洋建築史概説』（彰国社1962年刊）は、戦後の福井大学での講義録をまとめたものとして知られる。福井大学の建築史・建築論研究は、この森田以後、増田友也（1914～1981）を経て、1969年の渡部貞清（1918～2011）着任から現在の白井秀和氏へと至って本格的に展開したとすれば、森田の著書が原点となったと言える。そこで今年、森田の『西洋建築史概説』刊行50周年を迎えたことを記念して、講演会とシンポジウムが企画された。

まず記念講演会では、森田の研究を継承する加藤邦男氏が「森田先生と建築と」の表題のもとで講演した。学生時に接した森田の回想から話し始めた加藤氏は、徐々に森田と西洋建築の本題へと進み、特にフランス建築との関わりに着目して、森田の戦後代表作「京都大学基礎物理学研究所／湯川記念館」（1952）が、フランス近世のブロンデルやペロー、そして近代のペレーにみる秩序と節度を保った高貴な作品と通底し、さらに明晰な「古典精神」あるいは「建築の全一性」を希求する創造行為から制作されたことなどを説かれた。

次のシンポジウムでは、その前半で4名のパネラー（白井：西洋建築思潮、国京：日本建築・保存再生、池田：茶室・数寄屋、市川：森田慶一・渡部貞清）がそれぞれの専門の立場から各論発表を行った。そして後半では、パネラーに加藤氏も加わって幅広い視座から意見交換するとともに、会場から「建築史と建築論の関係」「建築論の意義と可能性」などの根本的質問が投げ掛けられ、内容的に深い討論が交わされた。「建築なるもの」を真に考えるため、歴史的（実証）かつ思想的（論証）な眼差しの大切さが示唆されたと言える。

なお当日は、北陸の晩秋らしい重い灰色の曇り空に小雨が降るなか、関西・京都からも積極的なご参加をいただき、また50年前に福井大学で森田の講義を聴いた方なども来て下さり、福井に於ける森田慶一を記念した講演会・シンポジウムは、とても充実したものとなりました。この企画の実現にあたり、ご協力いただいた多くの皆様に深謝いたします。



写真1 記念講演の加藤邦男先生



写真2 シンポジウムの討論風景

